

指揮
Associate Conductor & Creative Partner

福音史家(テノール)
Evangelist (Tenor)

イエス(バス)
Jesus (Bass)

ソプラノ
Soprano

カウンターテナー
Countertenor

合唱
Chorus

下女 I

下女 II

証人 I

証人 II

ユダ

ペテロ

ピラト

大祭司カヤパ

児童合唱
Children's Choir

特別客演コンサートマスター
Special Guest Concertmaster

J. S. バッハ
J. S. BACH

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.6
MASATO SUZUKI

ザッカリー・ワイルダー -p.7
ZACHARY WILDER

ドミニク・ヴェルナー -p.7
DOMINIK WÖRNER

森 麻季 -p.8
MAKI MORI

クリント・ファン・デア・リンデ -p.8
CLINT VAN DER LINDE

バッハ・コレギウム・ジャパン -p.9
BACH COLLEGIUM JAPAN

櫻井愛子

藤崎美苗

林 眞暎

鏡 貴之

浦野智行

山本悠尋

渡辺祐介

小池優介

東京少年少女合唱隊 -p.10
THE LITTLE SINGERS OF TOKYO

日下紗矢子
SAYAKO KUSAKA

マタイ受難曲 BWV 244 (メンデルスゾーン版)
[約 120 分] -p.12
St. Matthew Passion BWV 244 (Mendelssohn edition)

稽古オルガニスト: **流尾真衣**

字幕: **鈴木雅明**

字幕データ提供: **バッハ・コレギウム・ジャパン**

字幕操作: **Zimaku+**

【第一部】

1. Chorus mit Choral: Kommt, ihr Töchter, helft mir klagen
2. Evangelium
3. Choral: Herzliebster Jesu, was hast du verbrochen
4. Evangelium
5. Rezitativ und Arie
6. Evangelium
7. Arie: Blute nur, du liebes Herz
8. Evangelium
9. Choral: Ich bin's, ich sollte büßen
10. Evangelium
11. Choral: Erkenne mich, mein Hüter
12. Evangelium
13. Rezitativ und Arie mit Choral:
14. Evangelium
15. Choral: Was mein Gott will, das g'scheh allzeit
16. Evangelium
17. Arie mit Chor
18. Evangelium
19. Chorus mit Choral: O Mensch, beweine dein Sünde groß

[休憩]

[Intermission]

【第二部】

20. Arie mit Cho: Ach, nun ist mein Jesus hin
21. Evangelium
22. Choral: Wer hat dich so geschlagen?
23. Evangelium
24. Arie: Erbarme dich, mein Gott
25. Evangelium
26. Arie: Gebt mir meinen Jesum wieder!
27. Evangelium
28. Rezitativ und Arie
29. Evangelium
30. Rezitativ: Erbarm es Gott!
31. Evangelium
32. Choral: O Haupt, voll Blut und Wunden
33. Evangelium
34. Rezitativ: Ach Golgatha, unsel'ges Golgatha
35. Evangelium
36. Choral: Wenn ich einmal soll scheiden
37. Evangelium
38. Rezitativ und Arie
39. Evangelium
40. Rezitativ mit Chor: Nun ist der Herr zur Ruh gebracht
41. Chorus: Wir setzen uns mit Tränen nieder

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))
文部科学省 独立行政法人日本芸術文化振興会
協力: アフラック生命保険株式会社

3/10 Tue.

第690回 名曲シリーズ
サントリーホール 19時開演
POPULAR SERIES No.690 / Suntory Hall 19:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner
ヴァイオリン
Violin
コンサートマスター
Concertmaster

ベートーヴェン
BEETHOVEN

[休憩]
[Intermission]

モーツァルト
MOZART

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.6
MASATO SUZUKI

成田達輝 -p.10
TATSUKI NARITA

戸原 直
NAO TOHARA

ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61 [約42分] -p.16
Violin Concerto in D major, op. 61
I. Allegro ma non troppo
II. Larghetto
III. Rondo: Allegro

交響曲 第41番 八長調 K. 551 〈ジュピター〉
[約31分] -p.17

Symphony No. 41 in C major, K. 551 "Jupiter"
I. Allegro vivace
II. Andante cantabile
III. Menuetto: Allegretto
IV. Molto allegro

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

協賛: 大成建設株式会社

※本公演では日本テレビの収録が行われます。

3/14 Sat.

第285回 土曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SATURDAY MATINÉE SERIES No.285 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

3/15 Sun.

第285回 日曜マチネーシリーズ
東京芸術劇場コンサートホール 14時開演
SUNDAY MATINÉE SERIES No.285 / Tokyo Metropolitan Theatre 14:00

指揮
Associate Conductor & Creative Partner
ヴァイオリン
Violin
チェロ
Cello
オーボエ
Oboe
ファゴット
Bassoon
第1コンサートマスター
First Concertmaster

ハイドン
HAYDN

ハイドン
HAYDN

[休憩]
[Intermission]

ストラヴィンスキー
STRAVINSKY

鈴木優人 (指揮者/クリエイティブ・パートナー) -p.6
MASATO SUZUKI

瀧村依里 (読響首席) -p.11
ERI TAKIMURA (YNSO Principal)

富岡廉太郎 (読響首席) -p.11
RENTARO TOMIOKA (YNSO Principal)

金子亜未 (読響首席) -p.11
AMI KANEKO (YNSO Principal)

井上俊次 (読響) -p.11
TOSHITSUGU INOUE (YNSO)

林 悠介
YUSUKE HAYASHI

交響曲 第26番 二短調 〈ラメントチオーネ〉
[約17分] -p.18

Symphony No. 26 in D minor, "Lamentatione"
I. Allegro assai con spirito
II. Adagio
III. Menuet

協奏交響曲 変口長調 [約22分] -p.19
Sinfonia concertante in B flat major

I. Allegro
II. Andante
III. Allegro con spirito

バレエ音楽〈春の祭典〉 [約33分] -p.20

Le sacre du printemps

【第1部】大地礼賛

I. 序奏 - II. 春のきざしと乙女たちの踊り - III. 誘拐 -
IV. 春のロンド - V. 敵の都の人々の戯れ - VI. 賢人の行列 -
VII. 大地への口づけ - VIII. 大地の踊り

【第2部】いけにえ

I. 序奏 - II. 乙女たちの神秘的な集い - III. いけにえの賛美 -
IV. 先祖の呼び出し - V. 先祖の儀式 - VI. いけにえの踊り

主催: 読売新聞社、日本テレビ放送網、読売テレビ、読売日本交響楽団
共催: 東京芸術劇場 (公益財団法人東京都歴史文化財団)

助成: 文化庁文化芸術振興費補助金 (舞台芸術等総合支援事業 (公演創造活動))
文化庁 独立行政法人日本芸術文化振興会

3/5
定期

3/10
名曲

3/14
土曜マチネー

3/15
日曜マチネー

Maestro

指揮

鈴木優人

(指揮者/クリエイティブ・パートナー)

MASATO SUZUKI,
Associate Conductor & Creative Partner

鈴木優人が贈る 6年間の集大成!



©読響

2020年から読響の指揮者/クリエイティブ・パートナーを務め、数々の名演奏を残した新時代の旗手・鈴木優人が、〈マタイ受難曲〉〈ジュピター〉〈春の祭典〉などの傑作による三つのプログラムを指揮し、このポストを締めくくる。

1981年オランダ生まれ。東京芸術大学卒業後に、同大学院およびオランダ・ハーグ王立音楽院を修了。指揮者として国内外の楽団と共演し、鍵盤楽器奏者としても活躍している。音楽監督を務めるアンサンブル・ジェネシスでは、オリジナル楽器でバロックから現代音楽まで意欲的なプログラムを展開している。

2018年にバッハ・コレギウム・ジャパン (BCJ) の首席指揮者に就任。BCJオペラシリーズのプロデューサーを務め、20年のヘンデル〈リナルド〉は、バロック・オペラの新機軸として高く評価された。19年から世界的なヴィオラ奏者タメステイとの「バッハ・プロジェクト」を開始し、ヴェルビエ音楽祭など欧州各地で演奏した。23年3～4月には、名門オランダ・バッハ協会に客演し、J. S. バッハ〈マタイ受難曲〉(全13公演)を指揮。25年1～2月にはBCJとの欧州7公演を成功させた。

作曲家としても活躍するほか、13年から調布国際音楽祭のエグゼクティブ・プロデューサーを務め、NHK-FM「古楽の楽しみ」に出演するなど、活動は多岐にわたる。芸術選奨文部科学大臣新人賞、齋藤秀雄メモリアル基金賞、渡邊暁雄音楽基金音楽賞など受賞多数。23年4月から関西フィル首席客演指揮者。九州大学客員教授。



©Pauline Darley

福音史家 (テノール)

ザッカリー・ワイルダー

ZACHARY WILDER, Tenor

魅惑的な歌声で聴衆を魅了し、欧米で注目を浴びるアメリカ人テノール。17～18世紀のレパートリーを数多く披露し、国際的に活躍している。また、ブリテンをはじめとする20世紀の作品にも積極的に取り組み、高い評価を得る。これまでにクリスティ、鈴木雅明、ガーディナー、ピジョン、ダイクストラ、コルティら著名指揮者と共演し、持ち前の高いテクニックと洗練された音楽性で厚い信頼を獲得してきた。コンサートではフライブルク・バロック管、ピグマリオン、ラルベジャータ、レ・ザール・フロリサン、バッハ・コレギウム・ジャパンなど多くの楽団と公演を重ねている。CDはリチェルカール、CPO、ソリ・デオ・グロリア、ハルモニア・ムンディなど名門レーベルから数々の名演をリリース。読響初登場。

「深遠な音色」と高く評価され、世界で活躍する稀代のバス。ドイツ出身。2002年に開催されたライブツィヒ・バッハ・コンクールで優勝を果たし、国際的なキャリアの基礎を築いた。コワン、ヘンゲルブロック、ヘレヴェッヘ、鈴木雅明、ホーネックら著名指揮者のもと、ロイヤル・コンサートヘボウ管、ベルリン・ドイツ響、ミュンヘン放送管、バッハ・コレギウム・ジャパンなど世界各地の楽団と数多く共演を重ねている。オペラ歌手としても活躍しており、〈村の占い師〉表題役でデビューを飾って以降、〈愛の妙薬〉ドゥルカマーラなど数々の名演を築いてきた。日独リートフォーラム主宰。キルヒハイム音楽祭芸術監督。読響とは24年12月以来、2度目の共演。



©Wolfgang M. Schmitt, Kindsheim

イエス (バス)

ドミニク・ヴェルナー

DOMINIK WÖRNER, Bass

3/5
定期

Artist

3/5
定期

Artist



©Yuji Hori

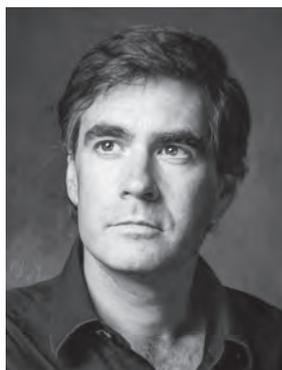
ソプラノ

森 麻季

MAKI MORI, Soprano

透明感あふれる美声で魅了する日本を代表する歌姫。文化庁オペラ研修所を修了後、ミラノとミュンヘンで研鑽^{けんさん}を積む。プラシド・ドミンゴ世界オペラコンクールをはじめ、国内外のコンクールで数多くの上位入賞を果たす。ワシントン・アワード、五島記念文化賞など受賞多数。1998年のワシントン・ナショナル・オペラ〈後宮からの逃走〉に日本人として初めて出演して以降、ケント・ナガノら名匠と共演を重ね、国際的に高い評価を博す。コンサートでは、フランクフルト放送響、N響など国内外の主要楽団と共演し、いずれも成功を収めている。2023年BBCプロムスにデビューし、翌年は山田和樹指揮のバーミンガム市響〈蝶々夫人〉表題役で絶賛された。読響とは2003年以降、共演を重ねている。

欧州を中心に活躍し、充実したキャリアを展開する俊英。南アフリカ出身。バロックから現代まで幅広い年代の音楽に精通し、数多くのレパートリーを誇る。これまでにシュライヤー、ノリントン、コープマン、鈴木雅明、デ・フリーント、アラルコンらの指揮のもと、ブリュッセル・モネ劇場やコンサートヘボウなど世界各地の主要ホールや歌劇場で活躍し、喝采を浴びている。BBCプロムス、ライブツィヒ・バッハ音楽祭などにも出演し、その澄んだ歌声で聴衆を魅了している。2023年には、鈴木優人指揮のオランダ・バッハ協会〈マタイ受難曲〉で共演し、大きな話題を呼んだ。数多くのCDをリリースしており、とりわけJ. S. バッハの〈口短調ミサ曲〉の録音は絶賛を博している。読響初登場。



カウンターテナー

クリント・ファン・デア・リンデ

CLINT VAN DER LINDE,
Countertenor

合唱

バッハ・コレギウム・ジャパン

BACH COLLEGIUM JAPAN, Chorus

1990年に鈴木雅明により創設されたアンサンブル団体。音楽監督に鈴木雅明、首席指揮者に鈴木優人を擁する。世界各国から集まる古楽のスペシャリストとともに、バッハを中心とした作品の上演活動を行う。100タイトルを超えるCDが高い評価を受けるほか、カーネギーホール、コンサートヘボウなど世界の主要ホールで演奏を行い、各地で好評を博す。2025年1月には、鈴木優人指揮によるヨーロッパ公演が各地で満場の聴衆を迎えられ、高い評価を得た。

【合唱Ⅰ】

ソプラノ 金持亜実、櫻井愛子（下女Ⅰ）、望月万里亜、山口清子
アルト 高橋幸恵、中村裕美、布施奈緒子、村松稔之
テノール 石川洋人、河野泰佑、近野桂介、水越 啓
バス 浦野智行（ユダ）、大井哲也、氷見健一郎、渡辺祐介（ピラト）

【合唱Ⅱ】

ソプラノ 柏原奈穂、澤江衣里、清水 梢、藤崎美苗（下女Ⅱ）
アルト 青木洋也、高橋ちはる、田村由貴絵、林 眞暎（証人Ⅰ）
テノール 鏡 貴之（証人Ⅱ）、谷口洋介、中嶋克彦、沼田臣矢
バス 小池優介（大祭司カヤパ）、小藤洋平、田中雅史、山本悠尋（ペテロ）

児童合唱

東京少年少女合唱隊

THE LITTLE SINGERS OF TOKYO, Children's Choir

ヨーロッパの伝統音楽に基づく音楽教育を目的とする日本初の本格派合唱団として1951年設立。グレゴリオ聖歌から現代作品までレパートリーは幅広く、同声から混声までの合唱作品をカバーする。松平頼暁、一柳慧、細川俊夫等への委嘱作品も多く手掛ける。年2回の主催公演の他、64年の訪米以来海外公演は34回を数え、2024年にはドイツ各地で5公演を実施。国内外のオーケストラ、オペラ劇場との共演も多く、C. アバド、R. ムーティ、F. ルイーゼらとも共演し高い評価を得た。21年創立70周年では「70周年記念コンサートシリーズ2021-2023」を全4公演開催、最終公演をサントリーホールで実施。25年の「細川俊夫生誕70周年記念コンサート」は好評を博した。読響とは度々共演し、好評を博している。

卓越した技術で幅広いレパートリーを得意とし、^{みなぎ}熱いパッションを漲らせる実力派。1992年生まれ。パリ国立高等音楽院で学ぶ。2010年ロン＝ティボー国際コンクール、12年エリザベート王妃国際コンクールで第2位に入賞して注目を集めた。クリヴィヌ、アルトリヒテル、インキネン、山田和樹らの指揮で、ルクセンブルク・フィル、プラハ響などと共演。21年1月には、ヴァイグレ指揮、読響とハルトマン作品を演奏し絶賛された。ホテルオークラ音楽賞、出光音楽賞など受賞多数。一柳慧の作品を読響と初演するなど、現代作品にも意欲的に取り組んでいる。使用楽器は、宗次コレクションから貸与された1711年製のストラディヴァリウス「タルティーニ」。読響とは、2012年以降、共演を重ねている。



ヴァイオリン

成田達輝

TATSUKI NARITA, Violin



©読響

ヴァイオリン

瀧村依里

(読響首席)

ERI TAKIMURA, Violin
(YNSO Principal)

©読響

チェロ

富岡廉太郎

(読響首席)

RENTARO TOMIOKA, Cello
(YNSO Principal)

©読響

オーボエ

金子亜未

(読響首席)

AMI KANEKO, Oboe
(YNSO Principal)

©読響

ファゴット

井上俊次

(読響)

TOSHITSUGU INOUE, Bassoon
(YNSO)

J.S. バッハ

マタイ受難曲 BWV 244 (メンデルスゾーン版)

メンデルスゾーンの蘇演

1829年3月11日、フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)の指揮の下、ジングアカデミーの会員を中心としたベルリンの音楽家たちが、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ(1685~1750)の〈マタイ受難曲〉を蘇演した。

もともとの初演は1727年4月11日、ドイツ・ライプツィヒのトーマス教会。同教会の階上西端にある(いささか狭い、とバッハ自身が証言する)木造聖歌隊席に、演奏グループを二つ配置した。当時は身廊東端の上方にも、小オルガン付きの木造バルコニー(“ツバメの巣”)があったという。

こうした環境を存分に活かしてバッハは、西側に合唱と管弦楽の組み合わせを二つ、東側にはコラルの定旋律を歌う小合唱を据え、教会空間の階上3方向から音楽が聴こえるようにした。この大仕掛けのサウンドに、当時の会衆は耳をそばだてたろう。

しかし、作品はバッハの死後、忘れ去られてしまう。唯一、好事家による楽譜の伝承によってその命脈は保たれた。その未成り^{うらな}が若きメンデルスゾーンの手に渡る。運命の出会いである。

さて蘇演以降、ベルリン発の“バッハ熱”はドイツ各地に広がっていく。記録に残るだけでも1833年までに国内6か所で、〈マタイ受難曲〉は上演された。こうした動きを経て、メンデルスゾーンは改めて〈マタイ受難曲〉の演奏に挑む。ときは1841年、ところは初演地、ライプツィヒ・トーマス教会である。

『マタイ』の描く「人間模様」

バッハの〈マタイ受難曲〉はその名の通り、新約聖書『マタイによる福音書』の第26、27章、つまりイエスの受難の物語に基づいて書かれた、大規模な宗教音楽曲だ。演奏には独唱陣と二つの合唱、二つの管弦楽を必要とする。キリスト復活祭の前々日にあたる金曜日の礼拝で献奏される。

新約聖書には四つの福音書が含まれる。巻頭から『マタイ』『マルコ』『ルカ』『ヨ

ハネ』と並ぶ。最初に編まれたのが『マルコによる福音書』で、この『マルコ』と諸伝承とを基に書かれたのが『マタイ』と『ルカ』だ。だから『マルコ』『マタイ』『ルカ』には共通点が多い。そのことからこれら3書を共観福音書と呼ぶ。共観福音書の受難記事を比較すると、『マタイ』にしか現れないエピソードの存在が浮かび上がる。それは次の通り。

- [A] 第26章第2節：「人の子は十字架につけられるために引き渡される」を挿入する
- [B] 第26章第25節：最後の晩餐におけるイエスとユダの対話を挿入する
- [C] 第26章第52~54節：イエス逮捕の場面を旧約聖書の預言の成就として描く
- [D] 第27章第3~10節：ユダの死のエピソードを挿入する
- [E] 第27章第19節：ピラトの妻のエピソードを挿入する
- [F] 第27章第24節~25節：手を洗うピラトのエピソードを挿入する
- [G] 第27章第43節：十字架上のイエスに対する民衆の罵倒を追加する
- [H] 第27章第51~53節：イエスの死と同時に起こった奇跡を増やす

『マタイ』の記者は『マルコ』が穩当にイエスの伝記を編んだことに満足しなかった。初期キリスト教会の結束を高めるには、イエスが神の子であることを明確にしなければならない。その視点から『マタイ』は着手された。『マタイ』の記者が第26、27章で採った戦略は次の3点だ。

- (1) イエスの周囲の人々の「人間模様」を深く掘り下げること(B・D・E・F・G)
- (2) イエスの受難を旧約聖書の預言の成就として位置づけること(A・C・D)
- (3) 奇跡を厚く記述すること(H)

ここで注目したいのは(1)。「マタイ」の記者の目的はイエスの神性を明確にすることだったが、周囲の人間の様子を描いてそれを浮き彫りにする戦略だったため、期せずして「人間模様」が色濃く表れた。Bは最後の晩餐の場面。ユダの裏切りに読み手の注意を向けさせ、Dの伏線をなす。Dでユダは裏切りの代価である銀貨を神殿に投げ入れたあと、首をくくって死ぬ。Eでピラトの妻は悪夢にうなされ、夫に対しイエスと関わりを持たぬよう進言する。Fではピラトが十字架刑に必ずしも積極的ではなかったことを示す。Gでは十字架上のイエスに対して民衆が「神に頼るならば神に救ってもらえ」と悪態をつく。

このように『マタイ』は、イエスの十字架刑をめぐる、周囲の人々がどのように思い、行動したかという点を厚く記述する。〈マタイ受難曲〉の台本(Ch. F. ヘンリーツィ)もまたそれを踏襲した。バッハの音楽も当然その意を汲んでいる。

これらに、他の福音書にも記述の残る「ペテロの否認」(第26章第69~75節)が加わる。「ペテロの否認」にまつわる第39曲のアリア「憐れんでください」と、「ユダの死」にまつわる第42曲のアリア「私のイエスを返してくれ」とが、「人間模様」の主軸として対照をなしている。

メンデルスゾーンは何を省き、何を残したか

メンデルスゾーンは1841年の上演に際して、管弦楽を19世紀化し、大胆に楽章を取り除き、細部にしばしば変更を加えつつも、その根底においては〈マタイ受難曲〉の“古格”を守ろうとした。

管弦楽にはクラリネットやバセットホルンが含まれる。これは、すでに^{すた}廃れていたオーボエ・ダモーレやオーボエ・ダ・カッチャの代用だ。また一部、オルガンを使用するが、通奏低音としてではなく、音響効果を狙ってのこと。一方、コントラバスが旋律を、チェロが和音を弾くことで通奏低音をなす。鍵盤楽器はそこにはない。

コラールは13曲のうち5曲を、レチタティーヴォは11曲のうち4曲を、アリアは15曲のうち6曲を、メンデルスゾーンは削除した。ただし、1829年の蘇演時に省いたコラール1曲とアリア4曲を復帰させている(その中には「私のイエスを返してくれ」が含まれる)。

こうした変更を行いながらメンデルスゾーンは、“原マタイ”の「人間模様」を色濃く反映する部分については、そのまま残している。こうした措置がなされたのも、編曲者がぐだんの主旨に大きな価値を認めていたからに他ならない。

(澤谷夏樹 音楽評論家)

注) 解説文中の楽曲番号はバッハの原曲に基づく(メンデルスゾーン1841年稿とは異なる)。

作曲：《バッハ》1727年以前。1736年に大幅改訂／初演：1727年(初稿)、1736年(改訂稿)。いずれもライブツィヒにて／編曲：《メンデルスゾーン》1829年(ベルリン稿)、1841年(ライブツィヒ稿)／演奏時間：約120分

楽器編成／1 オケ：フルート2、オーボエ2、クラリネット2(バセットホルン持替)、ファゴット、弦楽器

2 オケ：フルート2、オーボエ2、ファゴット、弦楽器

オルガン、独唱(ソプラノ、カウンターテナー、テノール、バス)、合唱、児童合唱

ベートーヴェン ヴァイオリン協奏曲 二長調 作品61

バンドのドラマーがスティックを4回叩いてカウントインするように、ティンパニ奏者が「ワン、ツー、スリー、フォー」とビートを刻んで曲が始まる。ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン(1770~1827)のヴァイオリン協奏曲ほど、風変わりなオープニングを持つ協奏曲は他にないだろう。

ベートーヴェンは当時の人気ヴァイオリニスト、フランツ・クレメントのためにこの協奏曲を作曲した。自筆譜に添えられた献辞は「クレメントのためにお情け(=クレメンツァ)で書いた協奏曲」(par Clemenza pour Clement)。ダジャレ好きだったベートーヴェンの遊び心が垣間見える。ベートーヴェンの弟子チェルニーによれば、作品が仕上げられたのは初演のわずか二日前だったという。1806年の初演は十分な成功を収められず、その2年後に手直しされた版が出版された。作品が真の傑作と認められるには、作曲者の死後、1844年に当時の神童ヨーゼフ・ヨアヒムがメンデルスゾーンの指揮のもとで演奏してセンセーショナルな成功を収めるまで待たなければならなかった。

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロツポ 冒頭のティンパニ4回連打のモチーフをくりかえし登場させながら、雄大でのびやかな楽想が展開される。作曲者自身によるカデンツァは残されていないため、ヨアヒム、クライスラーら歴史的なヴァイオリニストのカデンツァを使うなど、さまざまな選択肢がありうる。

第2楽章 ラルゲット 弱音器付きの弦楽器が穏やかな主題を奏で、これが装飾的に変奏される。切れ目なく終楽章へ。

第3楽章 ロンド、アレグロ 独奏ヴァイオリンが弾むようなロンド主題を奏で、オーケストラが力強く応答する。さまざまな性格の旋律をさしはさみながら、高揚感あふれる輝かしいクライマックスを築く。

(飯尾洋一 音楽ライター)

作曲：1806年／初演：1806年12月23日、ウィーン／演奏時間：約42分
楽器編成／フルート、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン

モーツァルト 交響曲 第41番 八長調 K.551 〈ジュピター〉

1788年、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756~91)は交響曲第39番、第40番、第41番〈ジュピター〉の最後の3曲の交響曲を、わずか二か月ほどの間に一気に完成に書きあげた。これらの傑作群がどのような目的で書かれ、いつ初演されたのかは、わかっていない。モーツァルトの足跡は残された数多くの手紙で知ることができるが、資料として最も頼りになる文通相手、父レオポルトが前年に世を去っているのが惜しまれるところである。

〈ジュピター〉の愛称はローマ神話の主神ジュピター(ギリシア神話でいうところのゼウス)に由来する。当時の交響曲の多くがそうであるように、これは他人が付けたもの。名付け親はイギリスで活躍した興行主ヨハン・ペーター・ザロモンとも出版者ヨハン・バプティスト・クラマーとも伝えられる。少なくとも19世紀初頭には英語圏で〈ジュピター〉の愛称が用いられており、これがヨーロッパ大陸にも広まった。

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ 序奏なしで、あたかも扉を連打するような重々しい主題で開始される。

第2楽章 アンダンテ・カンタービレ 憧憬に満ちた緩徐楽章。カンタービレ(歌うように)と指示されているが、歌の音楽と呼ぶには淡々としており、さまよい歩くような趣がある。

第3楽章 メヌエット 旋回するような主題による舞踊の音楽。中間部はためらいがちで、しばし歩みを止めるかのよう。

第4楽章 モルト・アレグロ 冒頭のジュピター音型(ド-レーファ-ミ)をもとに、複数声部を緻密に絡み合わせながら、エネルギーあふれる楽想が展開される。終結部のフーガの壮麗さは「ジュピター」の名にふさわしい。

(飯尾洋一 音楽ライター)

作曲：1788年／初演：不明／演奏時間：約31分
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部

ハイドン

交響曲 第26番 二短調〈ラメンタチオーネ〉

ウィーン古典派の作曲家フランツ・ヨーゼフ・ハイドン(1732~1809)は、長年にわたってハンガリーの大貴族エステルハージ侯爵家の楽長を務め、当主で、熱心な音楽愛好家だったニコラウス侯(1714~90)の命を受け、宮廷生活を彩る様々なジャンルの音楽の作曲と演奏、さらには宮廷楽団の楽員の管理や監督に至るまで多くの職務をこなした。交響曲第26番二短調も、エステルハージ家の楽団のために作曲され、自筆譜が消失したため正確な作曲年代は不明だが、1768年頃に書かれたと推測されている。

ハイドンの数少ない短調による交響曲のひとつで(104曲の交響曲のうち短調は10曲)、当時ドイツ文学界で盛んだった精神運動「シュトゥルム・ウント・ドランク(疾風怒濤)」の影響もあり、強い感情表現がみられる。〈ラメンタチオーネ(哀歌)〉の愛称は、複数の筆写譜に書き込みがあることに由来し、第1楽章と第2楽章には1761年にウィーンで出版された受難曲集から採られた旋律が用いられている。また、当時の交響曲としては珍しく、メヌエット楽章までの3楽章構成である。

第1楽章 アレグロ・アッサイ・コン・スピーリト 第1主題は、感情を表出するようなシンコペーションの切迫したリズムで始まる。第1オーボエと第2ヴァイオリンによる第2主題は受難のコラールによる。

第2楽章 アダージョ 「インチピト・ラメンタチオ(哀歌が始まる)」が引用される。オーボエと第2ヴァイオリンによる穏やかなコラールが静かに広がり、第1ヴァイオリンが美しい装飾を施す。

第3楽章 メヌエット 強弱の対比が鮮やかなメヌエットに対し、長調の中間部は流れる旋律と和音の強調が交替する。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1768年頃／初演：不明／演奏時間：約17分
楽器編成／オーボエ2、ファゴット、ホルン2、チェンバロ、弦五部

ハイドン

協奏交響曲 変口長調

1790年9月、エステルハージ家のニコラウス侯が亡くなった。後継の息子は音楽に関心を示さず、宮廷楽団は解散。ハイドンは、年金は与えられるものの、日常の義務から解放され、楽長は名目上のものとなった。ウィーンに移ったハイドンのもとには、いくつもの仕事が舞い込んだ。なかでもロンドンの公開演奏会で新作の交響曲を自身の指揮で演奏する、というドイツ出身のヴァイオリニストで興行主のペーター・ザロモンの企画はハイドンの心を動かした。1791年1月に音楽都市ロンドンに到着し、1年半の滞在で新作の交響曲を6曲発表するなど、ザロモン主催の演奏会での成功により作曲家の名声はさらに高まった。

ハイドンは、ロンドンの聴衆の音楽趣味に敏感で、流行を音楽に反映させることがとても上手かった。当時、ヨーロッパでは複数の独奏者と管弦楽による協奏交響曲の人气が高く、直前にはロンドンの別団体の演奏会でプレイエルが6つの独奏楽器による協奏交響曲を発表して話題を集めていた。ハイドンの、ヴァイオリン、チェロ、オーボエ、ファゴットを独奏楽器とする協奏交響曲も大成功を収め、独奏ヴァイオリンの技巧的な活躍はザロモンの演奏を想定して書かれた。

第1楽章 アレグロ 序奏はもたず、軽やかな第1主題、のびやかな第2主題が歌われる。オーケストラ提示部の第2主題が独奏楽器で示されるのは異例である。4つの独奏楽器が様々な組み合わせで対話し、ハイドン自作のカデンツァは第2主題をもとに作られている。

第2楽章 アンダンテ 独奏楽器が活躍する緩徐楽章。独奏のファゴットとヴァイオリンが穏やかな第1主題を示し、独奏チェロによる第2主題を独奏ヴァイオリンが彩る。再現部では独奏チェロと独奏ヴァイオリンの役割が交替する。

第3楽章 アレグロ・コン・スピーリト 堂々とした管弦楽の導入に独奏ヴァイオリンのレチタティーヴォがはさまれる。快活な主部は、華やかな独奏ヴァイオリンをはじめ、独奏楽器が表情豊かに歌い上げ、最後はぎっばりと結ばれる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1792年／初演：1792年3月9日、ロンドン／演奏時間：約22分
楽器編成／フルート、オーボエ2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦五部、独奏ヴァイオリン、独奏チェロ、独奏オーボエ、独奏ファゴット

3/14

土曜マチネー

3/15

日曜マチネー

Program Notes

ストラヴィンスキー バレエ音楽〈春の祭典〉

1913年5月29日、ロシア・バレエ団による〈春の祭典〉がパリのシャンゼリゼ劇場で初演された。「天才を発見する天才」と呼ばれたバレエ団を主宰するディアギレフ、音楽担当のイーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）、振付のニジンスキー、台本、背景画、衣装のレーリッヒ、4人の芸術家たちによる新しいバレエが誕生した。しかし、序奏が始まって1分もたたないうちに、野次と怒号が飛び交った。変則的な鋭いリズム、耳をつんざくような不協和音、圧倒的なオーケストラの響きに加え、舞台では顔に幾何学模様をつけたダンサーたちが内股で飛び跳ねるなど、これが芸術なのかと観客は困惑を隠せず、そのまま席を後にする人もいた。それは、非難と称賛が交錯する、音楽史上最大の事件だった。

ストラヴィンスキーは、モスクワのマリインスキー劇場の名バス歌手の息子として生まれた。サンクトペテルブルク大学で法律を学ぶが、在学中に作曲家になる意志を固め、リムスキー＝コルサコフに師事して作曲の勉強を続けた。1909年に発表したいいくつかの曲がディアギレフの目にとまり、彼からパリ・オペラ座で上演する新作バレエのための音楽を依頼された。祖国ロシアを離れ、パリの楽壇にデビューしたストラヴィンスキー。バレエ音楽〈火の鳥〉(1910)は、喝采を博し、第2作〈ペトルーシュカ〉(1911)も成功を収め、第3作〈春の祭典〉(1910～13)は、未曾有の大騒動となった。作曲者によると、〈春の祭典〉は、〈火の鳥〉の最後の数ページを作曲中に着想を得たという。「いけにえに決められたひとりの娘が死に至るまで踊る異教の儀式的場面を夢想した」(ストラヴィンスキー)。だが、すぐには着手せず、〈ペトルーシュカ〉を完成させたのち、1911年夏から取り組み始めた。ストラヴィンスキーは翌年の上演を希望したが、ニジンスキーの健康状態の悪化もあり、初演は1913年まで待たなければならなかった。

全体は2部構成で、第1部は生の世界を描き、第2部は死の世界を象徴する。すなわち、第1部は、大地の再生を祝い、人々は喜びに満ち、恍惚として大地を踏み鳴らし、第2部は、ひとりの少女が選ばれ、いけにえに捧げられる。音楽は第1部、第2部合わせて14曲から成り、続けて演奏される。

第1部「大地礼賛」

序奏 高音域のファゴットの神秘的な旋律で始まる。管楽器が主体となって狂乱の前の静寂とざわめきが描かれる。**春のきざしと乙女たちの踊り** 弦楽器による鋭い不協和音、独特のリズムのきざみが強烈な印象をもたらす。**誘拐** 太鼓を合図に金管楽器が咆哮し、打楽器が乱舞する。変拍子のリズムで次第に熱を帯びてくる。**春のロンド** フルートとクラリネットによる民謡風の旋律が示され、中間部は重たく引きずられる。**敵の都の人々の戯れ** 2台のティンパニが暴れ回る。**賢人の行列** ホルンの響きに導かれ、各パートが異なるリズムを同時に演奏したあと、長い休止となる。**大地への口づけ** わずか4小節の静かな音楽。**大地の踊り** 大太鼓やシンバルの響きが大地の目覚めを表す。管楽器の濃厚な音色で大地を讃える。

第2部「いけにえ」

序奏 夜の情景。木管楽器が妖しくうごめく。**乙女たちの神秘的な集い** ヴィオラの六重奏が不安げな旋律を奏でる。いけにえに選ばれることへの乙女たちの恐れを表している。その旋律は様々な楽器に現れ、ホルンの合奏を合図にいけにえとなる乙女が選ばれ、強音が11回連打される。**いけにえの賛美** 5拍子、9拍子、7拍子と目まぐるしく拍子が変わる激烈な音楽。**先祖の呼び出し** 低音楽器の響きに導かれ、管楽器がきっぱりと旋律を示す。**先祖の儀式** 大太鼓とタンブリンの神秘的なきざみなど、シャーマニズム(肉体から魂が離れ、天上や冥界と交信するという思想)の影響がうかがえる。**いけにえの踊り** 不協和音と不規則なリズムが繰り返され、最後の強烈な一打で乙女の生命は尽きる。

〈柴辻純子 音楽評論家〉

作曲：1910～13年／初演：1913年5月29日、パリ／演奏時間：約33分
楽器編成／フルート3(ピッコロ持替)、ピッコロ、アルトフルート、オーボエ4(イングリッシュ・ホルン持替)、イングリッシュ・ホルン、クラリネット3(バスクラリネット持替)、バスクラリネット、エスクラリネット、ファゴット4(コントラファゴット持替)、コントラファゴット、ホルン8(ワーグナーチューバ持替)、ピッコロトランペット、トランペット4、バストランペット、トロンボーン3、チューバ2、ティンパニ2、打楽器(大太鼓、シンバル、トライアングル、クロテイル、タンブリン、ギロ、銅鑼)、弦五部

3/14

土曜マチネー

3/15

日曜マチネー

Program Notes